2022 年度　地域文化学専攻・比較文化学専攻　学生派遣事業　研究成果レポート

BAT-OCHIR　BALJINNYAM

１．事業実施の目的

モンゴル国における家畜の交換に関する現地調査

２．実施場所

モンゴル国ウブルハンガイ県ハラホリン郡、モンゴル国立公文書館

３．実施期日

2022 年 7 月 27 日(水)～2022 年 12 月 9 日(金)

４．成果報告

●事業の概要

**１．現地調査の目的と概要**

報告者の博士論文論の目的は、モンゴル遊牧社会の家畜の「互奪性」および「交換」のメカニズムを歴史的な変化も含めて共時的かつ通時的に解明することである。報告者は、モンゴルで行われている遊牧にともなう「家畜泥棒」が一種の「交換」である、という仮説をもとに遊牧民たちの財産である家畜をめぐる奪取や交換、精霊への供犠を交換と捉えることで、モンゴル遊牧世界の交換活動の実態を調査した。今回の研究調査は、博士論文の第 2・3 章部分を構成するためのデータ収集である。

研究方法は、文献調査と長期の現地でのフィールド調査である。本調査では研究目的を達成するため、遊牧民の家畜の交換現象を三つの時代に分けて調査を実施した。①現代ポスト社会主義時代（1992～）に関するフィールド調査、②清朝時代末期（19 世紀後半-1910）に関する文献調査、③社会主義時代に対する（1924-1992）文献調査と聞き取調査である。具体的には、調査地であるハラホリン郡に滞在しながら観察・聞き取り調査を行うこと、モンゴル国立公文書館に通い研究資料を閲覧すること、研究対象者にインタビューすることであった。

**２．第一次フィールド調査**

本調査では、約２ヶ月間、調査地で遊牧民のようにゲルで暮らして現地調査を行なった。2022 年 7 月 29 日、調査対象であるウブルハンガイ県ハラホリン郡に到着し調査を開始した。定住地（群センター）からおよそ 20 キロ離れている牧草地の地名はエヘ・エレステイ（*ekh elestei*）、親族集団で構成された牧民グループの Kh 氏たちのジャルガ（谷）において、宿営している遊牧民 B 氏（38 歳、5 人家族））に挨拶し、そこで調査許可を得た。さらに調査の期間中利用できるゲルまで手配してもらった。そして B 氏と G 氏（B 氏の弟 30 歳、4 人家族）の家族と共にモンゴルの移動式住居（ゲル）を立て、彼らと日常生活を共に過ごしながら遊牧手段や家畜の交換につ

いて観察と聞き取り調査（全て 13 人にインタビュー）を行なった。

**３．文献調査**

2022 年 9 月 21 日～10 月 30 日の間、モンゴル国立公文書館に保管されている清朝時代末期に関する資料を閲覧した。また、社会主義時代に関する文献調査も行った。

**４．第二次フィールド調査**

11 月 1 日から調査地に戻り、B 氏の冬営地の準備（家畜餌の収集手段）と冬用、来年の春まで足りる食用の（牛肉、羊肉、山羊肉、馬肉）屠畜にまつわる儀礼などを詳細に観察し、それに関する情報を聞き取った。また社会主義時代に国営農場（サンギーン・アジ・アホイ）の牧民であった 7 人にインタビューを行うことができた。

●本事業の実施によって得られた成果

**1. ポスト社会主義時代（1992～）に関するフィールド調査の成果**

現地でのフィールド調査の対象地である Kh 氏を代表にして親族集団で構成された牧民グループの夏から秋にかけての牧畜作業と交換活動の実態を明らかにすることができた。主に親族構成、集団の構造、生活・経済状況、家畜の所有状況に関する基礎的なデータを得ることができた。その概要を以下のとおり、報告しておこう。

この牧民集団のいる谷は、モンゴル国のウブルハンガイ県ハラホリン郡の定住地（群センター）からおよそ 20 キロ離れている。その谷の長さは、南北 11 キロ、東西 3 キロに渡っている。2022 年、夏営地に宿営する牧民世帯は 9 世帯あった（図 1 参照）。彼らは全員、男性 Kh 氏の親族（弟、妹、孫、）である。また一世帯の所有する家畜は（ウマ、ヒツジ、ヤギ、ウシ）などが合わせて 1000 頭以上である。つまりこの Kh 氏の谷には、9 世帯が所有する約 1 万頭の家畜が放牧されている。彼らの所有する家畜の頭数は非常に多いため、毎日放牧できない状況になっている。調査地で観察した兄弟のＢ氏とＧ氏は別々の家（ゲル）に住んでいるが（図 2 参照）、家畜を合わせて放牧していた。二人の所有する家畜は、およそ 1308 頭（ウマ 318 頭、ウシ 120 頭、ヒツジ 650 頭、ヤギ 220 頭）である。

図 1. Kh 氏たちのジャルガ（谷）、夏営地の状況 2022 年 8 月、（筆者作成）

図 2. Ｂ氏とＧ氏の夏営地 2022 年 8、（筆者撮影）

また彼らの年収は、全て家畜によって成り立っていた。つまり夏の場合は基本的な収入になるのはヒツジである。例

えば、2 歳のヒツジを売れば、12 万トゥグルグ（日本円で約 6000 円）になる。彼らは現金が必要なとき、定住地（群センター）に位置するハラホリン市場に行って家畜を売る。秋の場合は 11 月からモンゴル全体が冬用、来年の春用の食用肉を準備するためにウシ、ヒツジ、ヤギ、ウマを屠畜する。遊牧民たちは多くの家畜を売った後、現金にして銀行に預金する。あるいは、家畜用の餌などと交換する。

またこの時期（秋）には家畜に対する家畜奪取が多く発生する。調査中に現地で 10 月末に大雪が降ったため、ウマの群やウシの群が行方不明になった。そこでＢ氏とＧ氏は一週間ほど家畜探索（*Maliin erel*）に行き、馬群をみつけることができた。しかし、ウシの群の中で 2 頭の牛がいなくなっていることが判明した。彼らは、*「犯人は隣にいる、親戚の中から取った、まだいつか見つかるだろう」*という。家畜は移動する財産であるため、牧民同士ではこのように家畜に対する「家畜奪取」が頻繁に発生するのである。

以上のように、遊牧民たちの日常生活に加わることで彼らの親族構成や生活・経済状況、家畜の所有状況を詳細に観察し、必要なデータを得ることができた。

## 2. 清朝時代の義賊に関する文献調査の成果

モンゴル国立公文書館での文献調査において X 氏という人物に関する記録を発見することができた。モンゴル高原で社会的な役割を持つ泥棒が記録されているのは、管見の限りでは、清末からである。この時期（19 世紀後半-1910）、富裕な王侯貴族と、漢人の商人に借金を負った牧民との間に貧富の格差が広がっていた。そうした中、貴族や金持ちを盗み、もっと貧しい人々に分配する「シリーン・サイン・エル（平原の良き男）」という義賊たちが生まれたのである（Oidov2013）。しかし、このような義賊たちに関する記録は物語や文学に限られており、確実な研究資料とする記録は今まで知られていなかった。

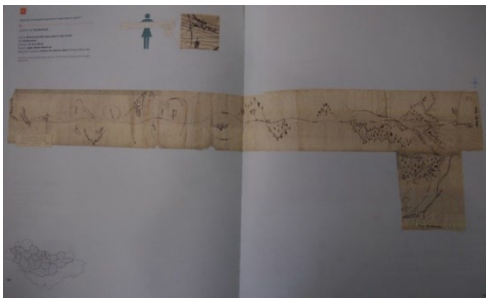

図 3. 義賊 X 氏の奪取した家畜の搬送経路の記録(筆者撮影)

報告者は予備調査（3 月）において、19 世紀後半の頃、実際に家畜の奪取をやっていた義賊X氏の奪取した家畜の搬送経路の記録を見つけることできた（図 3 参照）。この図から X 氏は約 600km 離れた場所から家畜の奪取を行い、遠隔地で交換をしていたことがわかる。

今回の調査において、X 氏という人物に関する文献をモンゴル国立公文書館で発見ことができた。そこで X 氏は 19 世紀に生きていた人物であり、当時の（「外ジャサク四部落等処一百五十旗の喀爾喀汗山盟圖什業圖汗部落二十旗」）、現在モンゴル国のボルガン県のモグド郡おける刑務所に収監されていたことがわかってきた。彼の逮捕された理由は、家畜（ウマ）を奪取し、遊牧民たちに分配したということである。また文献資料は満洲語で記録されているため、詳細に分析する必要がある。

## 3. 社会主義時代に関する文献調査と聞き取り調査の成果

社会主義時代（1924-1992）のモンゴルでは、個人、貴族やチベット仏教の寺院によって占有されていた多くの家畜や土地が公有化された。牧畜協同組合（ネグデル）や国営農場（サンギーン・アジ・アホイ）で設定された生産目標するために、それぞれの牧民に厳しい「ノルマ」が課された。またモンゴル人民共和国の人民審査委員会より毎月「ノルマ」達成率に関する厳しい検査を行っていたが、今回の調査では、その資料を入手することができた（図 4）。社会主義時代のノルマに関する資料は膨大なので、今回はハラホリン郡に限って 1971 年から 1974 年の報告書を複写した。

しかし、その一方で牧民たちが管理する家畜は「生きた財産/生産手段」であるため、季節によっては「ガン（干害）」や「ゾド（寒害）」が起こると、家畜が大量死することがあった。そのような時、牧民たちは、何とかしてノルマを達成させるために、家畜泥棒に他地域から家畜を盗んで来るよう依頼するのであった。または、牧民同士で交渉し（家畜の交換、家畜の贈与）などを行うことでノルマを達成していた。これに関しては、今回の調査では、聞き取り調査によって質的データを得た。

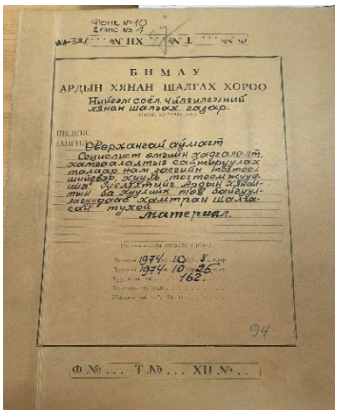


図 4 .人民審査委員会の報告書 1974 年

例えば、BA 氏（78 歳）のインタビューによると 1973 年の春はモンゴル国では「ゾド（寒害）」が起きたという。これについては、BA 氏は以下のように語った。

「私は、その当時、国営農場のメスヒツジの群（300 頭）を管理していた、厳しいゾドが起こったため、ヒツジ群の半分ぐらいが死んでしまった。その結果、国からのノルマを達成することができなくなった。また国の家畜を死なせてしまったため、多くの借金を払うことになった。それを聞いた周囲の人々がみんな協力してくれたんだ。それがつまりどのような協力であったかというと、個人所有のヒツジのある人はヒツジをくれたし、ウマを持っている人はウマをくれたんだよ。それで、なんとか国のノルマを達成でき、助かったんだよ」さらに BA 氏曰く、「家畜は自然と増加する日もあれば、減ってしまう日もある。逆に、友人は同様な状態に置かれても、私自身も所有する家畜をあげるだろうし、仮に自分が所有する家畜がなかったとしても、どこかからか取って来たりすることで、なんとかするさ」。

報告者は、現地でこのような話を多く耳にした。一見すると、違法行為であるようにも思われる。しかし社会主義の時代では、自然災害で家畜が死んでしまうと、その飼育担当者が逮捕されて刑務所に収監されることも普通に起きていた。これに対して、そうならないように国民同士が自ら選んだ解決手段が以上のような方法であった。本調査では、聞き取り調査によって、全 7 人から社会主義時代の相互扶助のための家畜の交換関する質的データを得ることが出来た。

## さいごに

今回の学生派遣事業では、現地で文献調査およびフィールド調査を行うことで実り多い調査

データを得ることができた。今回の調査で得られたデータを分析・考察し、学会発表や学術論文の形で発表していきたい。また、査読付きの学術誌に投稿することも目指していきたいと考えている。

**参考文献**

Oidov, B.

2013 *Ar khalhiin shilin sain erchüüd -2.* Ulaanbaatar: Startlain.

1974 *Üvürkhangai aimagt socialist ümchiin khadgalalt khamgaalaltiig saijiruulakh talaar nam zasgiin togtool shiidwer huuli togtooluudiin shiidveriig ardiin hynan shalgakh khoroo,Khuuliin tüv baiguulaguudaas khamtran shalgasan tuhai material.* Ulaanbaatar: National Archives of Mongolia.

●本事業について

本事業による経費支援のお陰で、モンゴルで長期の調査をすることができた。本調査で収集した研究データは博士論文の執筆のための大きな一助となった。本事業を認可していただいたことに感佩の意を表するとともに、専攻の先生方および担当者に御礼申し上げます。